西南学院大学　人間科学論集　第16巻　第1号　　1―30頁　2020年8月

絵本『くれよんのくろくん』を読む

― 子どもたちの遊びと仲間づくりに注目して ―

古　田　雅　憲

Descriptive Study on
"Blackie, the Crayon（Kureyon no Kuro-kun）"

Masanori Furuta

【はじめに】

絵本『くれよんのくろくん』はなかやみわさんの作。2001年の10月，童心社から出版された。作者にとって四作目の絵本である。インタビュー記事*1によれば，当初なかなか出版が決まらなかったが，いざ書店に並んでみればあっという間に"ベストセラー絵本"の仲間入りをしたとのこと。

その人気ぶりは，出版の翌々年（2003年）2月に「第12回 けんぶちの里絵本大賞」を受賞したことからも分かる――そして今もなお。実際，「絵本研究会」を自称する論者のゼミナールでも人気の一冊で，毎年，数人の受講生が取り上げたいと言ってくる。聞けば口を揃えて，実は幼いころから大好きだったと言う。ちなみに論者が先年あらめて買い求めた一冊はすでに第90刷（2017年3月3日付）を数えるほど。

【かわいらしい絵】

その人気のゆえん――多くの読者が，主人公たちや場面の様子を描く「かわいらしい絵」に共感の声を上げている。たとえばウェブサイト"EhonNavi Picture Books for Happiness"（絵本ナビ）*2の「みんなの声」（読者レビュー）をのぞいてみると，作者の絵の魅力について実に数多くの評言を見ることができる。（もちろんすべてウェブ上の匿名記事に過ぎないが，広汎な読者が抱い

た“読後感”を粗々うかがい知ることはできるというものだ。）参考までにその一部を掲げてみよう*3。（表題，ハンドルネーム，本文，投稿日の順。）

家族で気に入っています。　はなびやさん
　息子が4歳の時に買った本で，なかやみわの絵がかわいいので，家族で気に入っています。子どもにとっては，身近なくれよんの話だし，くれよんたちがいきいきと絵を描いていく姿は，とても感情移入しやすかったようで，毎日のように読んでいた時期がありました。（略）　2007/06/06

絵を描く楽しさが伝わってくる　Kusuco さん
　10色のくれよんたちに，目と口，ほっぺと手足がつけられているのですが，表情豊かに，軽やかな動きがよくわかるイラストでとってもかわいいです。子どももぐっと引き込まれてゆきました。（略）　2010/12/24

くれよんが主役　じっこさん
　娘はなかやみわさんの絵本はたいがい好きです。キャラクターのかわいらしさやストーリーのあたたかさに惹かれるのでしょうか。くれよんのくろくんシリーズも好きで、この本は家にあります。何度も読みました。くれよんたちの表情を見るのが楽しいようです。（略）　2016/09/01

　また次に掲げるとおり，作者のかわいらしい《キャラクターデザイン》に魅了されたという「声」が，出版後まもなくから最近に至るまで数多く寄せられている。（括弧内は投稿者のハンドルネームと投稿日。以下同様。）

・クレヨンたちの顔や表情が微妙にうまくかき分けられ，絵の構成も子供たちをひきつける（まめひめさん　2003/01/28）
・クレヨンがぴょんと飛び出してかってに画用紙に絵を描き始める。まあ，なんてメルヘンな世界（うららさん　2006/09/12）
・クレヨンが擬人化されて，お話をしているところが面白い
（はなしんさん　2007/01/17）
・どのクレヨンもとっても可愛らしく描いてあって，見ていてついついクレヨンを持ちたくなってしまいます（◇ラブラドール◇さん　2009/11/26）
・なかやみわさんの絵本は絵がとても可愛らしく，そのキャラクターの見せる表情やしぐさに和まされます（Koyoka さん　2015/04/14）
・くれよんたちが，まるで人間の子どもたちのように自由に動いたりしゃべったりしているだけで，読んでいて楽しいお話（まちポップさん　2019/09/05）

・身近な物が勝手に動き出してるお話ってなんだかワクワクしますね
（ピーホーさん　2019/09/20）

そのほか作者のかわいらしい筆づかい全般への愛着を吐露する「声」もまた少なくない。

・くれよんで描かれた線が「僕もくれよんで何か描きたい！」と思わせるところも魅力的（まるおくんさん　2005/03/20）
・絵のタッチが好きです。かわいらしくて，あたたかさが伝わってきます（トワイライトカフェさん　2006/03/04）
・絵がすごく可愛くて色がすごく鮮やかできれいな絵本
（ひろひろひもじいさんさん　2006/06/06）
・とても色遣いがきれいな絵本（タカ♪さん　2006/06/21）
・いろんな色が出てきてカラフル。ビジュアル的にも子どもは喜ぶ
（ユープーさん　2008/03/28）
・クレヨンが描く生き生きとした絵を楽しんでいます（ヨコリーさん　2010/06/01）

実際に作品を手にとって，まず【表紙】から記述“description”して読み深めてみよう。

【表紙／図版（1）】

机とおぼしい木地に置かれたクレヨン箱。側面の「なまえ」の欄に記名はないが正面に「こどもくれよん」と言うからには，きっと幼児の持ちものだ。箱のなかから10本のクレヨンたちが現れた――みんな“背たけ”や“頭の形”が同じ。どうやら買ってもらってから一度も使われてない“新品”らしい。

巻き紙部分に目と口とほほが描きこまれ，胴体からは腕と脚が伸びる。手と足とはクレヨン本体の色で彩色されている。なかなかおしゃれだ――この10本のクレヨンたちが物語の登場人物のようだ。

ヨイショッとばかりかぶせ蓋を持ち上げているのは黒（左端）と水色。身と蓋のすき間からクレヨンたちが飛びだす――先頭きって元気に走ってゆくのは黄土色と黄色。茶色と青が目くばせしながら笑顔で後に続く。箱側面の立ちあがりに手をついて，これからまたぎ越そうとしているのは赤

とピンクと緑。黄緑はこわごわとあたりの様子をうかがっている。

黒は，実は黄土色や黄色と同じくらい早く，クレヨン箱から出ていたのだ。が，彼は黄色たちのように先に走っては行かなかった――他のみんなが出てきやすいよう蓋を持ち上げてやっているのだ。『くれよんのくろくん』とは，そういう“周囲の様子に心を配る”“気の良い”子どもの物語である。

10本のクレヨンたちはみな「今風」で「ポップ」な《デザイン》の統一が施されて，いかにも「ひとつ家（クレヨン箱）に暮らす仲間」という《キャラクター》となり得ている――「みんなの声」に「輪郭のはっきりした今風の絵柄。色遣いも現実的」（ひよこまめさん　2006/05/11）とか「絵柄もポップな感じで親しみやすく楽しめました」（のらのら！さん　2003/08/29）などと言うとおりだ。

とても自然な作画なので気がつかないが，「くろくんたちの体の紙の部分，個々の部分はクレヨンの巻紙の質感を出したかったので，テクスチャーのある紙を切って貼っています」とのこと*4。そこにペンとカラーインク，色鉛筆で表情や動きを描きそえた――たいそう凝った表現技法だ。かつてキャラクターデザイナーとして活躍した作者ならではのこだわりということだろう。

【図版(1)―なかやみわ（2001）『くれよんのくろくん』（童心社）より引用，以下同様】

この《キャラクターデザイン》こそ作者の拠って立つ方法論である――それについて作者自身が次のように述べている。

「私の話づくりの基本はキャラクターなんです」そらまめくん，はりねずみのはりこ，くれよんのくろくん……と次々に印象深い魅力的なキャラクターを生み出しているなかやさん。なるほどと思わせる答が，開口一番返ってきた。「このキャラクターは，なにが好きで，なにが嫌いかとか，どういう性格なのかをかなり細かく考えるんです。そうすると，そらまめくんの世界とか，お友だち関係とか，環境とかができてきて，そのなかでどういうお話ができるかなって考えていくんです。いろいろと性格をつけてあげると，性格どおりにキャラクターが動くというか，そらまめくんだったらこんなふうにしゃべるだろうなってわかってくるので，お話がつくりやすいんです。まずはキャラクターです。キャラクターが気に入らなかったらやらないです」(略)

「私，擬人化がすごく好きなんです。命のないものに命があるように想像していくと話が膨らんでいっちゃうんです」『くれよんのくろくん』の誕生も，身近なところからだった。『そらまめくん』が終わって次に何やろうかなって考えたときに，画材変えてみようって考えたんです。そらまめくんのときは，色鉛筆とパステルが主だったので，今度はクレヨンで何かやってみようかなって思ったんです。クレヨンの箱を開けたときに，すごくよく使ってある色とほとんど使ってない色があって，それを見てたら，かわいそうだなって気持ちになってきちゃったんです。同じクレヨンとして販売されているのに，色が違うだけでこうも違うんだなって。子どもなんかだと，もっと明確なんじゃないかなって。子どもって好きな色だけを使うじゃないですか。私が子どものときは，青がすごい好きで，青ばっかり使っていたんですけど。人気がない色のクレヨンに哀愁を感じてしまって，一花咲かせてあげたいなって。そう考えている間に，キャラクター化されていって，この使われてない黒色が，すごくとろくって，引っ込み思案でっていうイメージができてしまったんです。そういうところから話が生まれ

てきたんです」

●なかやみわ（2002）「絵本作家になるまで」（取材・佐々木由美子，「ブックエンド」1，絵本学会）

私たちの身の回りにあるものが，徹底した《擬人化》によってひととしての存在感や生活感を帯びるとともに，キュートでモダンな《デザイン》によって生き生きとした表情や姿・動きをも得て，ついに自立した《キャラクター》となって物語世界を生きていく――そのような《キャラクターデザイン》こそ作者の拠って立つ方法論である。「そらまめくん」であれ「くろくん」であれ，なかや作品の高い人気はこの方法論への広汎な共感が支えている。

◇　◇

ただ一方で「好みがあると思いますが，私はなかやさんの絵がやさしくてかわいくて大好きです。」（“akiko”投稿日：2006/10/02）のようなレビューは，巧妙な《キャラクターデザイン》をあまり好まない読者の存在をも暗示する。この点，「そらまめくん」誕生のころを振り返って述べた作者自身の言葉は興味深く，またすこし切ない。

それまでは，林明子さんふうな路線で，子どもを主人公にした絵本を描いていたのだという。「自分を伸ばす道がそっちじゃなかったんですね。子どもを描けないんです。普通に見たら。子どもかもしれないけど，見る人から見たら子どもに見えないんだと思います。絵本ってこうだよねっていうのが自分のなかにあって，それに縛られていたんですね」

●なかやみわ（2002）「絵本作家になるまで」（取材・佐々木由美子，「ブックエンド」1，絵本学会）

【認めあい協働する喜び】

物語のあらすじ――

箱のなかでじっとしていられない十色のクレヨンたち。退屈のあまり，ある日，黄色が飛び出した。そして見つけた真っ白の画用紙にクルクルクルッと蝶

を描く。赤，ピンク，緑，黄緑と次々やって来ては，それぞれ得意の絵を描いていく。最後に黒もやって来たが，「きれいに描いた絵を黒くされたらたまらない」と仲間はずれにされてしまう。見かねたシャープペンシルのお兄さんもそばで慰めるしかない。

やがていざこざが始まった――それぞれ得意の絵を描くことに夢中になりすぎて，絵がめちゃくちゃになったのだ。クレヨンたちはたがいに責めあっている。それを見たシャープペンシルが何やら黒に耳打ちをする。黒はいきなり画用紙を真っ黒に塗っていく。クレヨンたちは絵を台なしにされたとばかり黒に詰めよるが，それをよそにシャープペンシルが涼しい顔で画面を引っかき始めた――二つ，三つ四つとみごとな打ち上げ花火が夜空に浮かびあがった。感動したクレヨンたちは，シャープペンシルに促されて黒を仲間に迎えいれた。

◇　　◇

この作品の主題の一つは，上のあらすじから容易に分かるとおり「仲間と認めあい協働することの喜びを描く」ことにある。この点，作者自身が次のように述べている。

> くろくんの話は友だちの優しさや大切さがベースになっています。小さな子が集団の中に入ったとき，すぐには受け入れてもらえないこともあります。受け入れられるか排除されるかはと子どもにとっては重大な問題です。子どもは未熟ゆえに，自分と違うものを本能的に拒絶してしまうことがあるのだと思います。そんな子どもたちに，どんな色にも良さがあることや自分の色を大事にするということを伝えていけたらと。子ども同士だけでそれが難しいときには，シャープペンのお兄さんのような大人が機転を利かせて助言をしたり，後押ししたりして良い方向に引っ張っていってほしい。実はそんな大人へのメッセージも，この絵本には少し入っているんです。
>
> ● MOE 編集部（2018）「デビュー 20 周年！なかやみわ 愛される絵本」（「Moe」40-4，白泉社）

同じ趣旨の言葉は比較的早い時期のインタビュー記事にも見えるから，この

「仲間と認めあい協働することの喜びを描く」という“願い”は，作者が絵本を作りはじめてからずっと大切にしてきたことであるらしい*5。

――この絵本（論者注；『そらまめくんのぼくのいちにち』のこと）をとおし，子どもに伝えたいことは何でしょう？

友だち関係をクローズアップしたいんです。わたし自身友だちによって救われたことが多かったから。勉強は嫌いだったけれど，友だちと会えるから学校に行くのが楽しかったし，友だちと過ごした時間が宝物になっています。いじめられて学校に行けなくなってしまったら，悲しいですよね。いっしょに何かに夢中になったり，共感できる友を得ることは，充実した人生を送るのにとても大切だっていうことを伝えたいんです。

●「本の窓」編集部（2006）「そらまめくんの著者に聞く 絵本は教養」（「本の窓」29-7，小学館）

作者の“願い”は読者にも広汎な共感を呼んでいるらしい。参考までに絵本ナビに寄せられた「みんなの声」の一部を掲げてみよう。

ググッと，きました。てんぐざるさん

ググッときましたよー。そらまめクンのシリーズしか読んだことなかったけど，感激しました。「仲間外れはいけない」「人にはそれぞれ個性というものがあって，見た目は役にたたないようでも，それがいつかとても素敵な形で輝くことがある」要はそういう話しなのだけれど，こういうふうに口でいわれても，子どもって，ピン！とこないですよね？　ところがこの絵本は，それを上手に物語の中に描いてくれています。（略）このお絵本を読んで，読んだ子供達の心に優しい気持ちが芽生えてくれるといいなと思います。　2003/08/06

みんななかよくね　りー・りな・めぐちゃんさん

（略）クレヨンたちがくろクンを仲間はずれにしてしまうのがとてもカワイそうなようで，「いけないねえ」などと言いながら絵本を楽しんでいますが，最後の花火は，くろクンがいなければ描けないステキな絵です。どんな色にもいらない色なんてない。それが，みんなと仲良くしましょう！ってメッセージになっているように思いました。　2005/02/09

絵本のあとはお絵かきも　ファニーママさん
（略）ある日「くろくんのお話ってどんなんやっけ？　もう一回読みたい」と訴えてきました。図書館で借りて読んであげると，「仲間はずれしたらアカンな」「くろくん，いいこやのにな」「でも，最後仲良しできてマルやな」と2歳ながらにお話を理解していました。仲間はずれは悲しいことで，皆にいいところがあって，皆で遊んだら楽しいって事を子どもなりに自然に身につけてくれたら嬉しいと思っています。（略）　2010/12/15

これらのほかにも同様の評言を少なからず見出すことができる。

・お友達の大切さ，個性はとってもステキで大切なことを教えてくれる魅力ある絵本（サンダーソニアさん　2006/11/15）
・そうだ！みんなちがってみんないい！ってことだなって思いました。いじめっていつの時代にもあるけれど，みんながお互いの違いを認めて，よい所を知っていくことができたら，そういうことも減るんじゃないかな（茶ジロウさん　2006/11/25）
・娘は自分をくろくんに置き換えて「自分だったら泣いちゃうかも」と言ってました。くろくんの寂しさ，くやしさ，喜びも，絵本を読みながら一緒に経験することができて，お友達に対してよりやさしい気持ちが生まれてきた気がします。また，お友達はどんな子でもみんな，なにかしらステキなところがあって，それぞれすばらしいんだということもわかってくれた気がします（かめずさん　2009/03/25）

ざっと読むにつけても「仲間と認めあいながら協働することの喜びを描く」という作者の“願い”は，確かに多くの読者のもとに届いているようだ。

◇　　◇

この「仲間と認めあい協働することの喜び」という主題は，さまざまな“遊び”の姿をとおして描きだされる――まず絵本のページを実際に繰りながら記述“description”して読み深めてみよう。

【扉絵（第①場面）】
箱の中で退屈しきった10色のクレヨン。なかでも黄色は特にウンザリした様子で手足をばたつかせている。

【同・本文】
しんぴんの　くれよんが　ありました。
「たいくつで，いやに　なっちゃうなあ」

【第②場面】

とうとう黄色が箱から飛びだして駆けていく。他のクレヨンたちはあっけにとられて見送るばかり。

【同・本文】

あるひ，きいろくんが　とびだした。

「ずうっと，しんぴんの　ままなんて　もういやだよ」

そういって，つくえのうえを　トットコ　トットコ　はしっていくと…

【第③場面】

机の上にまっさらの大きな画用紙を見つけた黄色は，両手を上げてバンザイポーズ――あんまり驚いたらしく右足もあげて片足だち。

【同・本文】

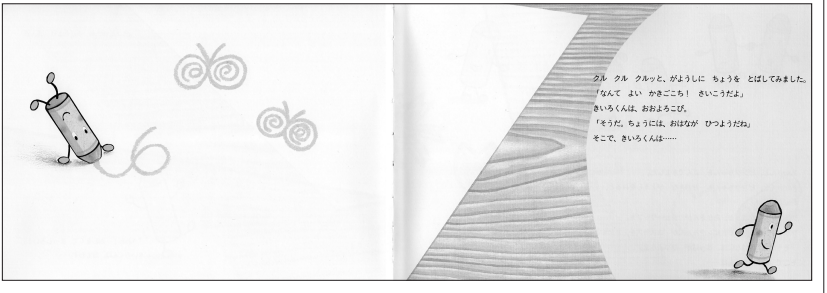
なんと　がようしを　みつけました。

「うわわ！　おおきくて，まっしろい！」

きいろくんは，おもわず……

【第④場面／図版（2）】

大きな画用紙の上でさかだちした黄色が，笑顔いっぱい，蝶々を二頭，三頭と描きちらしている。場面かわって画面右下，黄色が次ページへ向けて駆けていこうとしている。なんだかとても嬉しそう。



【図版（2）】

【同・本文】

クル　クル　クルッと，がようしに　ちょうを　とばしてみました。

「なんて　よい　かきごこち！　さいこうだよ」
きいろくんは，おおよろこび。
「そうだ。ちょうには，おはなが　ひつようだね」
そこで，きいろくんは…

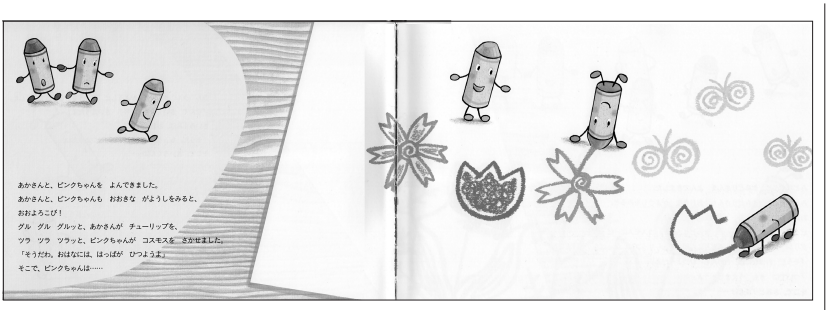
この四場面を使って“ひとり遊び”に興じる黄色の姿がたっぷりと描かれる。その様子があんまり嬉しげで楽しげなものだから，読者もたとえば「楽しそうねえ」とか「私もクレヨンで描いてみたいなあ」などと（特に読み聞かせの場などでは）言葉を交わしながら，あるいは（ひとり読みの場でも）黄色の描いた蝶々を指でなぞりながら，まさしく“傍観遊び”に興じるのだ――この作品は最初から読者の参加を許容する。（後に述べるが，作品を読んだ後，読者自身が実際に絵を描いてこそ「仲間と認めあい協働することの喜びを描く」という主題は真に理解されるはずだ。）

【第⑤場面／図版（3）】

画面左，黄色に連れられて赤とピンクが手をつないでやってきた。二人とも「何があるの」と問いたげな様子。場面かわって画面右，笑顔のピンクが元気よくさかだちしてコスモス二輪を描いている。また赤は四つんばいになってチューリップ二輪を描いている。そのかたわらで満足そうな黄色がニッコリ笑っている。

【同・本文】

あかさんと，ピンクちゃんを　よんできました。
あかさんと，ピンクちゃんも　おおきな　がようしをみると，
おおよろこび！
グル　グル　グルッと，あかさんが　チューリップを，
ツラ　ツラ　ツラッと，ピンクちゃんが　コスモスを　さかせました。
「そうだわ。おはなには，はっぱが　ひつようよ」
そこで，ピンクちゃんは…



【図版(3)】

【第⑥場面】

画面左，ピンクに連れられて緑と黄緑がやってきた。緑は腰に手をあてて「何があるの」と問いたげな様子。黄緑は「ちょっと待って」とばかり左手をあげて駆けてくる。場面かわって画面右，笑顔の緑が元気よくさかだちしてチューリップの葉っぱと茎を描いている。また黄緑は四つんばいになってコスモスの葉っぱと茎を描いている。そのかたわらでは，手をつないだ赤とピンクが黄色と並んで笑顔で見まもっている。

【同・本文】

みどりくんと，きみどりさんを　よんできました。
みどりくんと，きみどりさんも　おおきな　がようしをみると，
おおよろこび！
ビュッ　ビュッ　ビューッと，きみどりさんが　コスモスに　はっぱを，
グリン　グリリリーンと，みどりくんが　チューリップに　はっぱを
つけました。
「そうだ，おはなには　じめんも　ひつようだよ」
「ついでに　きみ　うえましょうよ」
そこで，きみどりさんは…

これら二場面を使って，黄色の“ひとり遊び”が赤とピンクを交えた“平行遊び”にひろがり，さらに緑と黄緑も加わっての“連合遊び”にひろがっていく様子が描かれる。

まず黄色・赤・ピンクの“平行遊び”――第④場面，駆けていこうとする黄色が描かれていたが，彼は「そうだ。ちょうには，おはなが　ひつようだね」と言いながら赤とピンクを誘いに行ったのだ。（だから黄色は赤・ピンクとの“協働”を意識しているが，）呼ばれてやって来た二人は大きな画用紙に大喜びで（我を忘れて）黄色の思いとは別に，それぞれ自分が得意とするチューリップとコスモスを描きちらしている。黄色と赤・ピンクとは同じ画用紙のうえでそれぞれ“平行”して遊んでいるのだ。

それが五人の“連合遊び”にひろがっていく――自分の得意なコスモスの花を描きおわったピンクが「そうだわ。おはなには，はっぱが　ひつようよ」と気づくのだ。そして緑と黄緑を誘いに行った。呼ばれてやって来た二人はやはり大きな画用紙に大喜びで（我を忘れて）はいるけれども，一方で赤とピンクの思いを汲んで（自分たちが呼ばれた意図を察して），それぞれチューリップ・コスモスの花に葉を描き添えている。彼ら五人は「蝶々に花，花には葉」とおたがいの思いや意図を察しあい認めあいながら，それぞれ自分の得意の絵を描いて（自己を実現して）遊んでいる。

【第⑦場面】

画面左，黄緑に連れられて茶色と黄土色がやってきた。二人とも「何があるの」と問いたげな様子。場面かわって画面右，笑顔の茶色が元気よくさかだちして木の根方の地面を塗っている。また黄土色は四つんばいになって木の幹を描いている。そのかたわらで，肩を組んだ緑と黄色が，また黄緑・ピンク・赤がみんな笑顔で見まもっている。

【同・本文】

ちゃいろくんと，おうどいろくんを　よんできました。
ちゃいろくんと，おうどいろくんも　おおきながようしをみると，
おおよろこび！
ビュルルルーンと，ちゃいろくんが　じめんを　つくりました。
ゴーゴリゴリゴーと，おうどいろくんが　きを　うえました。

「そうだ。やっぱり　あおぞらも　ないとね！」
「それから，くもも　うかべきゃ」

【第⑧場面／図版（4）】

笑顔の青が元気よくさかだちして青空を塗っている。また水色は四つんばいになってぽっかりと浮かぶ雲を描いている。その様子をそれぞれの描きたいものを一通り描き終えたクレヨンたちが笑顔で見まもっている。

【図版（4）】

【同・本文】

ちゃいろくんは，あおくんと　みずいろくんを　よんできました。
あおくんと，みずいろくんも　おおきな　がようしをみると，
おおよろこび！
クリン　クリンと，みずいろくんが　ふんわりくもを，
ビュルルーン　ビュルルーンと，あおくんが あおぞらをつくりました。
「ぼくらのえが　できてきたぞ」
くれよんたちは，はじめてのえに　だいまんぞく。

これらの場面では，九色のクレヨンたちがそれぞれ得意の部分を描きつつ全員で「一つの世界」を創っていく様子が描かれる――まず「そうだ，おはなには　じめんも　ひつようだよ」との気づきに応えて，新たに呼ばれた茶色が地面を塗っていく。「蝶に花，花には葉，花と葉には地面」とおたがいの思いや意図を察しあい認めあいながら，クレヨンたちの遊びが続いていく。そして

「ついでに　きを　うえましょうよ」との一言を契機に，「そうだ。やっぱりあおぞらも　ないとね！」「それから，くもも　うかべきゃ」などの気づきがさらに続いて，クレヨンたちの絵は（遊びは）全体として統一的な構造を得ていくのだ。

第⑧場面に添えられた文章に「ぼくらのえが　できてきたぞ」と言う――クレヨンたちは，それぞれ「ぼくら」というグループへの帰属意識を持ちながら「ぼくらのえ」を完成させるという目的を共有し，それを達成するためにそれぞれの役割を果たそうと努めたのだ。ここに至って彼らの遊びは“協働遊び”の構造を得た。その充実感・達成感たるや「くれよんたちは，はじめてのえに　だいまんぞく。」と言うとおりである――だから，この後，遅れてやって来た黒が仲間はずれにされてしまうのは，ある意味では当然の成りゆきである。

【第⑨場面】

画面左，画用紙の側に黒がぽつねんと立っている。口をへの字に曲げた横顔。画用紙の上には九人のクレヨンたち。口をへの字に曲げた黄色は，左手を腰にあて，右の手のひらを向けてきっぱりと拒絶する様子。片目をつぶって何か合図しているようにも見える。その隣では黄土色が顔を曇らせて困った様子，両手をもじもじさせている。口をまん丸に開いたピンクと赤はただただ驚いたという様子。そのそばで茶色は両手を腰にあて，さもさも困っているふう。残りのクレヨンたちは素知らぬふうで絵を描き続けている。

【同・本文】

すると，くろくんが　やってきて　いいました。

「ねえ，ぼくは？　ぼくは，どこを　かけばいいの？」

みんなは　いいました。

「くろくんは，まにあってるよ」

「きれいに　かいたえを　くろくされたら，たまらないよ…」

みんなは，くろくんを　なかまに　いれてくれません。

【第⑩場面／図版（5）】

仲間にはいれない黒が画用紙のかたわらにしゃがみこんでいる。そろえた両脚をしょんぼりと両手で抱え，表情を曇らせている。それをよそにクレヨンたちは，実に楽しそうに絵を描いている。とても朗らかな春の景色が“一つの世界”として出来上がっていく。黒のそばにはシャープペン。黒の頭を撫でてやりながら困惑している様子だ。

【図版（5）】

【同・本文】

「どんどん　かこう」
「もっと　もっと，かこう」
みんなは，たのしそうに　つづきを　かきはじめました。
「なんで　ぼくって，こんな　いろなんだろう…」
くろくんが　さみしそうに　していると，
シャープペンの　おにいさんが　なぐさめてくれました。
「げんきだせよ。くろくん」

遅れてやって来た黒が仲間はずれにされてしまうのは，ある意味では当然の成りゆきである――と言うのも“ひとり遊び→平行遊び→連合遊び→協働遊び”という「遊びをとおして紡がれる人間関係の段階的深化」を経て，（絵本では数ページのうちの出来事だが，実際の子どもたちの関係づくりにあっては年少児～年長児の時期にかけて，それ相応の時間のなかで，しかもさまざまな紆余曲折を経て紡がれていくのだ），はや「ぼくら」の社会は形成されてしまっ

ているのだから。ひとたび出来あがってしまった社会に，後から新たに参入するのは容易でない。

もちろん社会の構成員が智恵を備えた寛容な大人たちであれば，遅れてやって来た者を上手に受容することもできる――物語に即して想像するなら「くろくん，この木にとまるほど立派なカブトムシを描いておくれよ」などと誰かが言いさえすれば良いのだ*6。黒は喜んで描いただろうし，みんなも喜んで受けいれただろう。

が，クレヨン（子ども）にあっては，遅れてやって来る者も，また彼を迎える者たちも未熟である――遅れてやって来た（間に合わなかった）うえに「ねえ，ぼくは？　ぼくは，どこを　かけばいいの？」とはっきりしない黒に対して，クレヨンたちは彼を上手く受容できないまま，言うに事欠いて「もう間に合っている」「黒くされたらたまらない」などと言ってしまうのだ。

この稚拙な言葉のやりとりに短慮は禁物である――クレヨンたちはけっして黒の存在じたいを否定したのではなかったのだから。彼らにはただ“新たな他者”としての“遅参者”を上手に迎えいれる智恵と寛容さが備わっていなかったにすぎない。すべて子どもの未熟さゆえに起こったことだ。また黒もこの後「なんで　ぼくって，こんな　いろなんだろう…」と自分の存在自体を責めるようなことを言うが，大人なら他者の発した稚拙な言葉を言葉のままに受けとめてみずからを責めるようなことはしない。これもまた未熟さの現れに違いない。

◇　　◇

この黒が味わう悲哀を描くくだりを厳しく評する「みんなの声」もある。

仲間ハズレ　ギフトさん

くろくんだけが仲間ハズレにされて可哀相だな。最後に凄い事をしたから仲間に入れてもらえたの？凄い事ができなかったら，そのまま仲間ハズレなの？（略）2007/08/28

いじめではなく差別では？　Tami さん

息子が３～５歳のころ，「そらまめくん」シリーズと「どんぐりむら」シリーズを繰り返し読みました。でも，この「くれよんのくろくん」のシリーズにはまったく惹

かれなかった様子です。息子は，人がいじめられるシーンが苦手です。それに尽きるかな。そして，私が納得できない箇所について。くろくんがいじめられるシーンです。色が黒いという，持って生まれた性質のためにいじめられるというのは，あまりにかわいそうです。これはいじめではなく差別です。友達に乱暴するからなどという理由で，皆から嫌われるのであれば，子どもにもわかりやすいし，納得できますが。差別を受けている人間が他人から受け入れられるためには，何かものすごいことをやらないといけないのでしょうか。ただ存在しているだけでは受け入れてもらえないのでしょうか。悲しいですし，子どもに読ませたくない絵本です。　2016/05/04

いじめ!?　優雅さん

くろくんが可哀想。自然の中に黒って普通にあります。虫とか石ころとか。絵本で不快になったのは初めてでした。何か特別な能力がないとくれよんの世界のいじめは横行するのでしょうか？（略）　2019/06/14

同様の評言は，けっして大きな「声」ではないようだが，出版後まもなくから最近に至るまでずっとささやかれているようだ（投稿が10年以上の時間を隔てていることに留意したい）。それらに応えて作者自身は次のように言う。

子どもには残酷な部分もあります。「嫌いだ」って平気で言うし，意地悪もすれば仲間はずれにもする。でもそれはしようがないこと。何かの拍子に仲間の気持ちがひとつになったり，楽しめたりすることもある，そんなことに気づくきっかけに，この本がなってくれたらいいですね。

●「本の窓」編集部（2006）「そらまめくんの著者に聞く 絵本は教養」（「本の窓」29-7，小学館）

子どもって未熟さゆえに，自分とは違う異質なものを本能的に排除してしまったりするところがありますよね。でもこの絵本を読むことで，そういう目にあっている子がちょっと勇気を持てたり，逆にお友達にそういうことをしちゃっている子が「いけなかったな」って気づいてもらえたりしたらいいなって思います。

あとは，大人にはシャープペンのおにいさんの役割に気づいて欲しいですね。子どものことは子ども同士で解決するほうがいいという意見もありますが，私は，未熟な子どもが自分たちだけで問題を解決するのは無理だし，

大人が関与しないのは結構無責任なことじゃないかと思うんです。どちらかに加担するということではなく，うまくまとめられるように，親や先生がさりげなく背中を押してあげる。そうすれば，いじめの多くはなくせるんじゃないでしょうか。

●「なかやみわさんの絵本『くれよんのくろくん』　目立たない子にも活躍の機会がある」（ウェブサイト「好書好日」2018.09.03 付インタビュー記事，文：谷口絵美）（https://book.asahi.com/article/11765776）

これらのインタビュー記事（二つの記事が 10 年以上の時間を隔てていることに留意したい）からかいま見えるのは――子どもの表す「残酷な部分」について，それを「未熟さ」から発する「しようがないこと」と認めたうえで，でも，その未熟さに対して大人が目を背けることなく「関与」し続けることが大切だ――そう言い続ける作者の強い思いである。また自作が子どもたちの「気づき」を促したり，「さりげなく背中を押して」勇気づけたりする「きっかけ」となって，いつか「何かの拍子」に子どもたちの成長を支えることになればよい――そう願い続ける作者の慎ましやかな姿である*7。

◇　◇

黒の味わう痛みは確かに辛く切ないものに違いないが，それはただ“新たな他者”の帰属と受容をめぐる未熟な言葉たちが引き起こした行き違いの結果にすぎない。作者の言うとおり，このいざこざが，自他ともに“子ども”であり“未熟”であるがゆえに生じたものである点を見失ってはならない。（他の 9 人のクレヨンたちは“協働遊び”をしているが，直後【第⑪場面】では彼らの協働性があっけなく崩壊する様子が描かれる――「ぼくらのえ」はめちゃくちゃになってしまうのだ。彼らもまた未熟なのである。）

（物語のなかで）いま必要なことは，まず黒に「クレヨンたちの発した心ない言葉はけっして『黒が黒である』という存在じたいへの拒絶ではない」と得心させ，また同時に「『黒が黒である』というみずからの存在じたいを誇って良いのだ」と勇気づけることである――それを立派に成しとげるのがシャープペンだ。描かれた彼の優しげで飄々とした姿からは想像しにくいが，彼こそ

は，黒の痛みから目を背けることなく，また怒りにまかせて誰かを責めることもなく，みずからの智恵（物語のなかではスクラッチ描法）を以てクレヨンたちの未熟を支え導く，言わば“子どもの未熟を受けとめる覚悟”と“子どもを導く智恵と寛容さ”を備えた“あるべき大人の姿”そのものである。作者が「大人にはシャープペンのおにいさんの役割に気づいて欲しい」と言うのは，まさにこのことに違いない。

【芸術的な美】

この作品の最大の美点は，子どもの未熟を支え導く大人の智恵が，言葉によらず芸術的な美――「スクラッチ」という絵画技法によって表現されている点である。

【第⑪場面】

大きな画用紙がさまざまな色で埋めつくされている。色と色，形と形が重なりあって，もはや何がなんだか分からない。クレヨンたちのある者は憤然と口をへの字に曲げ，別の者は眉をさかだてて相手に詰めよる。たがいに指図しあっている者やとうとう両耳を手でふさいで困惑している者も。たいへんないざこざが始まってしまったようだ。画用紙のかたわらではシャープペンがニッコリほほえみながら，黒に何やら耳打ちをしている――黒はエッとばかり驚いた様子。

【同・本文】

なんだか，くれよんたちが　さわぎはじめました。
「わたしの　かいたうえに，かくのは　やめてよ」
「きみこそ，ぼくのうえに　かくなよ」
かくことに　むちゅうになりすぎて，くれよんたちのえは
めちゃくちゃに　なってしまいました。
そこで，シャープペンの　おにいさんが　こっそり　いいました。
それをきいた　くろくんは　びっくり！

【第⑫場面】

めちゃくちゃになった画用紙を，黒が真っ黒に塗りつぶし始めた。クレヨンたちは口をぽかんと開けてあっけにとられるばかり。水色だけが怒った様子で隣にいる黄土色をにらみつけている。でも黄土色は黒に気を取られて何も聞いていない様子だ。

【同・本文】

いきなり，みんながかいた　えのうえに　ビューッと　あたまを
すべらせました。

【第⑬場面】

黒は画用紙の上にさかだちして真っ黒に塗りつぶしていく。巻き紙もめくれ上がるほどゴシゴシがんばっている様子だ。クレヨンたちはワラワラと逃げだした。

【同・本文】

ビュッ　ビュッ　ビューと，あたまのかたちが　かわるほど，
まっくろに　してしまいました。

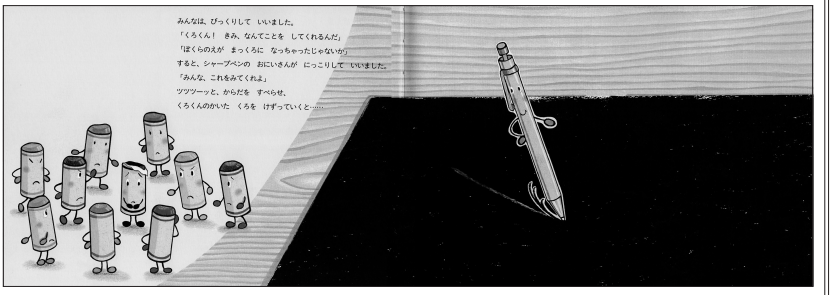
【第⑭場面／図版（6）】

真っ黒に塗りつぶされた画用紙の横で，黒がクレヨンたちに取り囲まれている。それぞれ怒ったり，あきれたり，困ったりしている様子だ。黒はただただ恐縮するばかり。頭をすっかりすり減らし，巻き紙もたれ下がって，なんだか憐れを誘うほど。そのいざこざをよそに，シャープペンが真っ黒になってしまった画用紙の上を引っかきながら滑っていく。彼の足跡には何やら複雑に色づいた線が浮かびあがる。

【同・本文】

みんなは，びっくりして　いいました。
「くろくん！　きみ，なんてことを　してくれるんだ」
「ぼくらのえが　まっくろに　なっちゃったじゃないか」
すると，シャープペンの　おにいさんが　にっこりして　いいました。
「みんな，これをみてくれよ」

ツツツーッと，からだを　すべらせ，くろくんのかいた　くろを
けずっていくと…



【図版(6)】

【第⑮場面】

黒が塗りこめたところをシャープペンが削って，二つ，三つ四つと花模様が浮かびあがった。まるで夜空に打ち上がった大きな花火のよう。

【同・本文】

あっというまに，おおきな　はなびが，いくつも　よぞらに
うかびました。
「ぼくらのえが　はなびになった！」

下地に塗られた様々な色彩（クレヨンたちが夢中で描いたせいでめちゃくちゃになった画面）をいったん黒く塗りつぶし，次にクギやペンなど先のとがった道具（シャープペンの軸先）で引っかいて線画を起こす――それがスクラッチの描法だ。

その描法が物語を展開するために選ばれた理由は明快だ――黒がもっとも活躍できるから。作者も次のように述べている。

「『くれよんのくろくん』の時は，画材を変えてみようと思って，子どもの頃使っていたクレヨンの箱を出してみたのです。あっと思いました。使いこんだクレヨンと，使われていない黒いクレヨンの差が歴然としていて，黒いクレヨンがかわいそうになったのですね。小学校二年生の夏休みの宿

題で花火の絵を描いたことを思い出しました。あれなら黒をいっぱい使えると思ったのです。スクラッチという技法ですが，小学校の時は母に教えてもらいました。その花火の絵で賞状をいただいたことなんかも思い出し，花火でオチをつけるお話を作ったわけです」

●「こどもの本」編集部（2003）「この人にインタビュー　なかやみわさん『くれよんのくろくん』でけんぶち絵本の里大賞を受賞」（「子どもの本」29-7，日本児童図書出版協会）

シャープペンの助言を得た黒が，「黒が黒である」というごく当たり前のことを存分に発揮することによって，みごとに芸術的な美を創りだす――物語を読み進めてきた読者が，見開きページ全面に描きだされた「夜空に打ち上がった大きな花火」を目のあたりにして，一瞬のうちに晴ればれとした気持ちになることは言うまでもない。その瞬間のカタルシスに比べれば，その後に続く「クレヨンたちと黒の和解と承認」の話は“つけたし”とさえ思われるほどだ。

多くの読者が「自分もスクラッチをやってみたい」とか「実際にクレヨンを手にとって絵を描きたい」などの感想を口にするのも当然だろう。参考までに「みんなの声」の一部を掲げてみよう。

絵本のあとはお絵かきも　ファニーママさん

入園前の見学に行った幼稚園で，園児さんがこの本を読んでもらっていました。娘もちょっと緊張しながら，その輪に入れてもらいました。強張った表情でじっと絵本を見ていたので，ちょっと難しかったと思いましたが…帰り道「お家帰ったらくれよんだしてな～！」とワクワク♪くれよん遊びも大好きだもんね～その後，しばらくは「くろくんごっこ」にはまりました。そして，ある日「くろくんのお話ってどんなんやっけ？もう一回読みたい」と訴えてきました。図書館で借りて読んであげると，「仲間はずれしたらアカンな」「くろくん，いいこやのにな」「でも，最後仲良しできてマルやな」と２歳ながらにお話を理解していました。仲間はずれは悲しいことで，皆にいいところがあって，皆で遊んだら楽しいって事を子どもなりに自然に身につけてくれたら嬉しいと思っています。ちなみに，絵本→くれよん遊び→絵本のループになるので，図書館の本は汚したらダメなので購入しました（笑）　2010/12/15

何回よんでもあきません　ちぇりーマムさん

はじめて娘によんできかせたのは3歳ごろ。それから何回よんだことでしょう。クレヨンに不要な色なんてないのと同じに，人はみんないろんな個性があってそれぞれに大切な人，必要とされる人なんだよ…親としてはついついそんなメッセージを勝手に本から汲み取って子供にも伝えたくなってしまうのですが，娘はそんなことよりもまずクレヨンで描く楽しさをこの本から教えてもらったようです。次々と登場するきいろくんやあかさんやピンクちゃんの描く楽しい絵に見入り，最後に登場する画面いっぱいの花火に毎回大歓声！じぶんでもひっかき絵がやりたいとさっそくチャレンジしていました。何回も読むうちにクレヨン達のそれぞれの表情などにも目がいくようになり，ああ，こうやって読むごとにこの本からいろんなメッセージを娘なりに受け取っているんだなあと同じ本を繰り返し読むことの大事さを教えてくれたはじめての本でしたし，また子供にとっても何回読んでもあきない絵本のようです。2011/02/15

同様の評言をほかにも少なからず見ることができる――この作品は，クレヨン遊びや芸術的表現活動に対する興味や意欲をかきたてる力を備えている。

・私が幼稚園の頃大好きだった遊びのひとつ（略）真っ黒に塗りつぶした絵をひっかくだけなのに，出来上がった絵はとても神秘的。何色が出てくるのか，ワクワクしながらひっかいていた記憶（略）またやってみたくなりました（“モペット”さん投稿日：2003/03/23）

・この本を買って随分経ってからですが同じようにシャープペンを使って黒を削ってみました。息子も わー！出た出た♪ と大喜び（ケンケンマンさん　2006/09/09）

・このスクラッチをする授業で，導入として読み聞かせをしています。花火の絵が完成したところでは おぉ～っ!! という低い歓声が聞かれます（こぶた文庫さん 2006/10/09）

・途中で，あ～小さい時，私もやったな～とあの感動を思い出しました。きれいにクレヨンで色を塗った上に，黒のクレヨンで真っ黒に。そして，シャーペンなどで削っていくととってもきれいな色が出て…。子供心にすごいと思った（さわこさん 2008/04/28）

・お絵かきのとっかかりにもなるし，情緒にも響くものがあるし，目でも楽しめるし，とても楽しい絵本ですよ。特に最後の花火は本当にきれいです。まだ本物を見たことのない息子も，うっとり見ていましたよ」（スミレ123さん　2008/08/23）

・これを見てお絵かきしたい！やらせてあげたい！と思いました…。真っ白い紙にツ

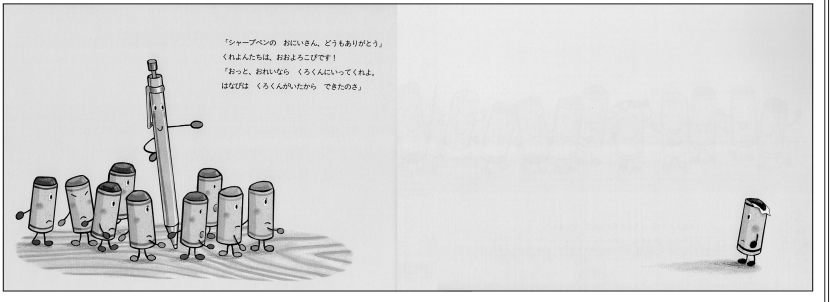
ラツラっとなぐり書きしてくのって，楽しかったよなぁ，と子どもの頃の気持ちを思い出しました（亜観さん　2008/12/19）

・はじめてのひっかき絵に対するどきどき感・わくわく感をひきだしてくれるすばらしい絵本（ふわっとさん　2010/11/06）

【身を以て知る】

この場面に続いて「クレヨンたちと黒の和解」が描かれる。

【第⑯場面】



【図版(7)】

シャープペンのそばに駆けよったクレヨンたち。ニッコリ笑ったシャープペンが指し示す方をみんな振りかえっている。（水色だけはまだ機嫌が悪い様子。）彼等がキョトンと見つめる先には，ポツンと立ちつくす黒の姿。頭はすり減り，巻き紙も破れて垂れさがっている。一生懸命に画面を塗りつぶしたからだ。みんなの注目を浴びてすこし困惑気味。

【同・本文】

「シャープペンの　おにいさん，どうもありがとう」
くれよんたちは，おおよろこびです！
「おっと，おれいなら　くろくんにいってくれよ。
はなびは　くろくんがいたから　できたのさ」

【第⑰場面】

それぞれ満面の笑顔を浮かべてクレヨンたちが黒を囲んでいる。あの水

色でさえもニッコリ笑っているほどだから，みな大喜びしているらしい。黒は左手を腰にあて，右手で頭をかきながらほほえんでいる。すこし照れくさそう。ようやく 10 人揃って一つの仲間になれた瞬間だ。

【同・本文】

　くれよんたちは，くろくんをかこんで　いいました。

「くろくん，さっきは　ごめんよ」

「くろって，すごいね」

　シャープペンのそばに駆けよったクレヨンたちは，「おれいなら　くろくんにいってくれよ。はなびは　くろくんがいたから　できたのさ」と諭されて黒の方を振りかえる。そして，巻き紙が破れてしまうほど頭をすり減らした黒の姿を見て“理解”するのだ，黒がまさにわが身を削って一途に仕事をやりとげたことを。「くろって，すごいね」と言ったクレヨンの感じとった「すごさ」とは，すべてを塗りこめる「黒」という色じたいの強さを言ったものであると同時に，黒の表した一途さに対する称賛でもある。だからこそクレヨンたちは素直に「くろくん，さっきは　ごめんよ」と言えるのである。

　もちろん読者もまた容易にそう“理解”するだろう。が，大切なことはそれを“身を以て知る”ことだ――この作品を読み終えた後，実際にクレヨンを手にとってスクラッチにチャレンジした読者だけが，あらためて黒のすごさを“身を以て知る”のだ。

　実際やってみなければ分からない――画用紙の全面を真っ黒に塗りつぶすのはタイヘンなのだ。力を入れてゴシゴシと，だんだん小さくちびていく黒いクレヨンを何度も持ち替えながら，巻き紙を少しずつ剥きながら，指先をベトベト真っ黒にしながら，力を入れて，しかし折れないように注意しながらゴシゴシと塗っていく。小さな画用紙でさえ全面すべて黒く塗りつぶすことは実にタイヘンなのだ。

やってみました！　ぐーたれさん

　3 歳の息子と読みました。真っ黒になってしまった紙からきれいな花火が出てくるということがどうしても納得できなかったようで，「やってみよう」ということにな

りました。2回しか読まずにやってみることになったのですが，「最初はきいろ，ちょうちょ」「あかさんがお花」「くろくんは入れてもらえないんだよ」などなど，断片的ではありますが，ストーリーにそって進めていくのでびっくり。子供は集中して聞いているんですね。。。小さな紙でやりましたが，塗りつぶすのは意外と大変で，「くろくん頑張ったんだね」と感心していました（笑）。そして自分でシャープペンを使い線を引いた時には「きれーーーーい」と一言。絵本のテーマは仲間外れであったり，友情であったりと深いと思いますが，それはどこまで理解できたかわかりませんが，いつもとはすこし違う遊びができ，楽しさを共有できたのでおすすめしたいと思います！　2010/09/15

実際にスクラッチに挑戦してみてタイヘンさを体験することによって，読者はそのタイヘンなことを身を削ってやり遂げた黒の「すごさ」を身を以て知る――その「すごさ」とはまさに「身を削って一途にやりとげた者が帯びる存在の確かさ」である。この作品の最大の美点は「芸術的な造形美をきっかけとして読者を芸術的な表現活動に誘い，その実体験を前提として，〈他者の存在そのもの〉と〈その内に秘められた可能性〉とに畏敬の念を以て向き合うべきことを教唆する」点である。極論だが，この作品の真価は，読後，スクラッチに興じてみた人にしか分からない。

◇　　◇

以上，なかやみわさんの絵本『くれよんのくろくん』という作品について，記述“description”しながら読み深めを試みた。特に【かわいらしい絵】，【認めあい協働することの喜び】，【芸術的な美】，【身を以て知る】の四点から，この作品の美質をあらためて検証したつもりである。行き届かぬところ，また言い過ぎたところなど多々ある，諸賢のご批正を乞う次第である。

［註］

＊1）株式会社 絵本ナビ（EhonNavi Corporation）が運営するウェブサイト“EhonNavi Picture Books for Happiness”（絵本ナビ）に掲げられたインタビュー記事による。

実は，童心社で出版が決まる前，何社かこのダミーを持って持ち込みをしたのですが，出版には至らなくて…。でも，私はとってもいいものが描けたと思っていたので，ずっと大切に温めていたんです。その後，童心社から「一緒に絵本を作りませんか？」と言っていただいたとき，今度こそ…と気持ちを込めて，お見せしたら，

すぐにOKをいただいて，出版することができました。（略）
　私の中でも今までにないスピードで重版がかかり，読者の方からのおはがきもたくさんいただきました。当時は，まだ新人だったので1冊，1冊，絵本を出させてもらうのがすごく大変で，次はいつチャンスが来るか分からないという状況でした。童心社とのお仕事もはじめてだったので，確実に結果を出さなければいけないと自分の中でもプレッシャーをかけていたので，はがきという形で，読者の方から反応が返ってきて，すごくホッとしたのを覚えています。
●「自分だけの『くれよんのくろくん』」絵本ができる！　『くろくんたちとおえかきえんそく』なかやみわさんインタビュー」（ウェブサイト“EhonNavi Picture Books for Happiness”（絵本ナビ）2015.11.19付インタビュー記事）（https://www.ehonnavi.net/specialcontents/contents.asp?id=200&pg=2）

　なおウェブサイト“EhonNavi Picture Books for Happiness”（絵本ナビ）の運営事情に関しては次の公表資料に詳しい。
●株式会社 絵本ナビ（EhonNavi Corporation）法人営業担当編集（2014）「絵本ナビ媒体資料（2014年4～6月）」（http://www.ehonnavi.net/PDF/media_201404-06.pdf）その中に「出版社110社以上の協力を得て運営されている唯一の公認サイトです。年間訪問数は約600万人，メルマガ配信数約12万件，登録会員数約30万人，掲載レビュー数約27万件，紹介作品数約4万冊と，日本最大級の絵本専門サイトです」と言う。

＊2）同ウェブサイトの「みんなの声」（読者レビュー）はあらかじめ登録した会員のみ投稿が認められている。上［註＊1］に掲げた公表資料によれば，2014.01現在の登録会員は「296,000人」と言う。
　なお投稿文の掲載については編集部による可否判断がある。

＊3）『くれよんのくろくん』については324人分のレビューが掲載されている（2019.12現在）。ちなみにその数は「レビュー数ランキング」で「30位（全4万冊以上のうち）」と言うから，「多くの読者が自分の読後感を表明したくなる作品のひとつ」と思って良いだろう。
　なお https://www.ehonnavi.net/ehon00_opinion.asp?no=65&bri=&hk=&st=1&pg=1 から33頁にわたる当該頁には「表題，☆印5個による評価，ハンドルネーム，年齢層，立場，居住県名，読み聞かせの対象，本文，投稿日，参考になりました“感謝”ボタン，“感謝”人数」が明示されている。その引用にあたっては論述の必要に応じて「表題，ハンドルネーム，本文，投稿日」のみ抄出した。また「本文」の引用については紙幅の都合から論述に関わる部分の前後を抄出し，併せて論旨から注目する箇所に下線を私に付した。

＊4）註1に掲げたインタビュー記事には別に次のように言う。

――（略）先ほど，新しい絵本を描くときは画材を変えると仰っていましたが，「くろくん」はやはり，クレヨンで描いているのでしょうか？
　背景やくろくんたちが描いている絵はクレヨンを使っています。あとはカラーインクとペンと色鉛筆。それに貼り絵も使っています。

――え，貼り絵ですか？ 特別に，貴重な原画を見せていただきました！
　くろくんたちの体の紙の部分，ここの部分はクレヨンの巻紙の質感を出したかったので，テクスチャーのある紙を切って貼っています。あと，白い画用紙も貼っているんですよ。
――貼り絵をされているなんて！ すごく自然なので，描いていると思っていました。
　原画を見ないと，なかなか気づかないと思いますよ。（略）

＊5）同じ趣旨の言葉はさらに近年のインタビュー記事のなかにも繰り返し見出される。この“願い”が作者にとってきわめて大切なテーマであることがよく分かる。

――最初はみんなに仲間外れにされるけれど，シャープペンのお兄さんの機転もあり，最後は，くろくんの活躍でみんな仲直りするというストーリーは，なかやさんの子どもの頃の体験から生まれたのですね。
　人を見た目だけで判断したらいけないということ，人それぞれに良いところがあるんだよと，伝えたいことをシンプルに上手くまとめられたと思っています。実は，『くれよんのくろくん』のストーリーは自分の作品の中でも一番納得のいく形で作ることができたと思っているんです。
●「自分だけの『くれよんのくろくん』」絵本ができる！ 『くろくんたちとおえかきえんそく』なかやみわさんインタビュー」（ウェブサイト“EhonNavi Picture Books for Happiness”（絵本ナビ）2015.11.19 付インタビュー記事）（https://www.ehonnavi.net/specialcontents/contents.asp?id=200&pg=2）

――「そらまめくん」は仲間，「どんぐりむら」は職業というように，なかやさんの作品にはそれぞれ物語を通して伝えたいテーマが明確にあるが，「くれよんのくろくん」では，予想していなかった反響が読者から多く寄せられた。
　この作品を構想したときはまだ子どももいなかったので，私はただ「描く」ということを通して，あまり目立たない子が一躍花を咲かせる物語にしたい，と考えていました。それが読者からのお便りを読んでいると，「10 色のクレヨンが子どもたちの世界に類似している」というふうに見てくれる方が多かったんです。「初めて保育園や幼稚園で生活をする子どもが集団の中で戸惑っている様子が，くろくんとすごく重なる」「くろくんに感情移入してしんみりしていた子が，最後の場面を見て自分のことのように喜んでいるのを見て，『ああ，何か園で辛い思いをしていたんだな』と気づかされた」……そうした親御さんの意見もありました。
　子どもって未熟さゆえに，自分とは違う異質なものを本能的に排除してしまったりするところがありますよね。でもこの絵本を読むことで，そういう目にあっている子がちょっと勇気を持てたり，逆にお友達にそういうことをしちゃっている子が「いけなかったな」って気づいてもらえたりしたらいいなって思います。
　あとは，大人にはシャープペンのおにいさんの役割に気づいて欲しいですね。子どものことは子ども同士で解決するほうがいいという意見もありますが，私は，未熟な子どもが自分たちだけで問題を解決するのは無理だし，大人が関与しないのは結構無責任なことじゃないかと思うんです。どちらかに加担するということではなく，

うまくまとめられるように，親や先生がさりげなく背中を押してあげる。そうすれば，いじめの多くはなくせるんじゃないでしょうか。

●「なかやみわさんの絵本『くれよんのくろくん』　目立たない子にも活躍の機会がある」
（ウェブサイト「好書好日」2018.09.03 付インタビュー記事，文：谷口絵美）
（https://book.asahi.com/article/11765776）

＊6）これに関して印象的な「声」があった。

子供は素直です。。。　ぷにぷにザウルスさん
　初めて読んだ時に私は，仲間外れはいけないというテーマなのかなと思ったけど，子供は違った。「くろくんは，どうして何もかかないの？」「木にカブトムシを描けばいいのに」善も悪もない子供に仲間にいれるとかいれないとか関係ないんだ。それは，大人が勝手に考えてることで，すぐにそんな風に考えてしまうことが恥ずかしくなった。そして，柔軟な心を持っている子供が嬉しく思えました。これからも，子供に大人の変な価値観を押し付けないようにしようと思いました。私にとって，ためになる一冊でした。この絵本のように，くれよんで花火をかいてみたら本当に綺麗に描けました。感動して，部屋に飾ってます。　2011/12/12

＊7）同じ趣旨の言葉は上に掲げたインタビュー記事（註1）のなかにも見出される。

――最初はみんなに仲間外れにされるけれど，シャープペンのお兄さんの機転もあり，最後は，くろくんの活躍でみんな仲直りするというストーリーは，なかやさんの子どもの頃の体験から生まれたのですね。
　人を見た目だけで判断したらいけないということ，人それぞれに良いところがあるんだよと，伝えたいことをシンプルに上手くまとめられたと思っています。実は，『くれよんのくろくん』のストーリーは自分の作品の中でも一番納得のいく形で作ることができたと思っているんです。
――シャープペンのおにいさんの存在も，物語の重要なポイントですよね。
　そうなんです。シャープペンのおにいさんは，我々大人の立場を表しています。子どもたちがグループでいると，大なり小なりトラブルが起きると思うのですが，それを子どもたちだけで解決するのって，かなりレベルが高いんです。そんなとき，だれか大人がアドバイスをしてあげることで，問題が解決することってよくあると思うんです。ただし，的確なアドバイスでしっかりと誘導できないといけないんですけどね。シャープペンのおにいさんは，仲間外れにされたくろくんを慰めつつ，誰も責めないやり方で，くろくんたちを仲直りさせます。私たち大人も，機転を働かせ子どもたちのトラブルを解決しましょうという，大人へのエールとメッセージを込めているんです。